

## 迷惑行為の悪影響を理解していない人物に対する認知

佐藤 洋大 (名古屋大学 大学院情報学研究科, yodai0601@gmail.com)

石井 敬子 (名古屋大学 大学院情報学研究科, ishiik@i.nagoya-u.ac.jp)

唐沢 穰 (名古屋大学 大学院情報学研究科, mkarasawa@nagoya-u.jp)

Person perception of agents who lack understanding of the potential harm of nuisance

Yodai Sato (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Keiko Ishii (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Minoru Karasawa (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

### Abstract

Evaluations of nuisance behavior are often negative, even when such behavior does not cause significant harm. However, factors contributing to these negative evaluations remain unclear. This study examined whether observers negatively evaluate actors who do not understand the potential harm resulting from their nuisance behavior. Study 1 demonstrated that individuals were perceived as cold and incompetent when they did not understand that nuisance behavior was harmful, even in the absence of such behavior. Study 2 replicated these findings and showed that regardless of engagement in nuisance acts, an agent who was unaware of the harm their acts might cause was blamed and socially distanced. These judgments were sequentially mediated by the perceived coldness of the agent and perceived future likelihood of engagement in nuisance. Moreover, unaware agents were associated with animals, which have low intellectual abilities. These results indicate that negative nuisance evaluations are driven primarily by the perpetrator's unawareness of their impact on others, rather than by the harm caused by the behavior.

### Key words

nuisance, person perception, warmth and competence, dehumanization, mentalizing

### 1. 目的

自分は降りもしないのに、電車の出入口付近に立ち続けて周囲の人の乗降を妨げる人物は、迷惑な人物であると否定的に評価される。このような迷惑行為は一般に、犯罪行為のように特に大きな危害を生むわけではない。それにもかかわらず、迷惑行為は社会的に問題視されるほど、見た者から強い否定的反応を引き出す。この齟齬の原因を明らかにするために、迷惑行為の分類(吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999)や迷惑行為の影響を受ける人の多さ(石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉, 2000)といった、迷惑行為の性質に焦点を当てた分析が行われてきた。しかし吉田他(1999)は、検討した迷惑行為の半分が分類できていない。また石田他(2000)は、より多くの人に影響を及ぼすと想定される迷惑行為ほど迷惑度が高いことを明らかにするのにとどまっている。このように、迷惑行為そのものの性質を分析したこれまでの研究では、迷惑行為への否定的反応が生じる理由は十分に明らかになっていない。

本研究は、迷惑行為に対する否定的反応が、行為による悪影響への非難よりもむしろ、行為者に対するネガティブな属人的評価の反映であることを明らかにする。つまり、迷惑行為への否定的評価は、発生した被害よりも、迷惑行為をするような人格に向けられることを示す。実

際、逸脱行為に対する人々の否定的評価の対象は、行為そのものに限らず、その行為者にまで及ぶことが多くの研究で明らかになっている(Pizarro & Tannenbaum, 2012; Uhlmann, Pizarro, & Diermeier, 2015)。特に、迷惑行為による他者への実害は小さいか、全く存在しない。そのため、行為の実害に基づいた評価よりも行為者への属人的評価が、迷惑行為への否定的評価の主因であると考えられる。

本研究では、迷惑行為者へのネガティブな属人的評価を生じさせる要因は、行為者が無神経という望ましくない心的状態にあるように見えることだと考える。これまでの研究によれば、迷惑行為はその行為者の無神経さと結び付けられやすい(北折, 2008)。無神経であるとは、周囲に対する自身の悪影響について考えを巡らせず、結果的にその悪影響を理解していない状態である(北折, 2017)。この無神経さが迷惑行為への否定的反応を生じさせると考えられる理由は、たとえ他者に一切の危害を加えなくとも、望ましくない心的状態にある人物は否定的に評価されるためである。これまでにも、望ましくない心的状態にある人物は、たとえ他者へ危害を及ぼさなくても、ネガティブな属人的評価を受けることが指摘されている(例えば、Hirozawa, Karasawa, & Matsuo, 2020; Inbar, Pizarro, & Cushman, 2012)。特に、逸脱行為を間違っただと考えていない人物が否定的に評価されることは(Schwartz & Inbar, 2023)、無神経であることにネガティブな属人的評価が向けられることを示唆する。これらから、本研究では迷惑行為への否定的反応を生じさせているものは、その無神経さに向けられる属人的評価であることを検証する。

無神経であることがネガティブな属人的評価を生じさせることを検証するために、本研究ではシナリオ実験を用い、判断対象人物が無神経であるのかどうか、および実際に迷惑行為によって他者に悪影響を与えたのかどうかを操作する。特に本研究では、無神経な人物が迷惑行為によって他者に悪影響を与えなかったとしても、依然として否定的に評価されることを検証する。そしてこの検証を通じ、迷惑行為への否定的反応の主因は相手の無神経さであり、実行された迷惑行為ではないことを明らかにする。

### 1.1 基本2次元を軸とした対人認知

本研究では、無神経な人物に関する判断を多角的に調べるため、当該人物に対する印象・人間性評価・態度の3点を検証する。まず印象については、印象形成の基本次元として数多くの先行研究（レビューとして Abele, Ellemers, Fiske, Koch, & Yzerbyt, 2021）が用いてきた「温かさ」と「有能さ」次元の評価を検討する。「温かさ」は、親切さや正直さといった特性を表し、社会の中で他者と協力的な関係を築き、他者の福利に配慮してこれを守ることに関連するとされている（Abele et al., 2021）。つまり、実際に他者へ有害・有益な影響を与えることが、この次元上での評価を決定する主因であるといえる。このことから、実際に迷惑行為を行った人物は、他者に有害な影響を与えたことにより、迷惑行為をしていない人物よりも冷たいと評価されるだろう。しかし、迷惑行為の有無が温かさの評価に及ぼす影響は、判断対象人物が迷惑を理解している場合と比較して、これを理解していない、すなわち無神経である場合に小さくなると予想する。この予想の理由として、まず迷惑行為の悪影響を理解しているにもかかわらず迷惑行為をした人物は、他者に害を及ぼす意図や願望があると推測できることが挙げられる（Laurent, Nuñez, & Schweitzer, 2015）。他者を害する意図や願望を持つ人物は冷たいと評価されやすいこと（Reeder, Kumar, Hesson-McInnis, & Trafimow, 2002）を踏まえると、迷惑行為の悪影響を理解している迷惑行為者も冷たいと評価されやすいだろう。これに対し、その悪影響を理解して迷惑行為をしなかった人物は、他者への害を意図的に防止したという意味で、温かいと評価されやすいだろう。一方で、迷惑行為の有無にかかわらず、無神経な人物は他者の福利への配慮が欠けていること自体によって冷たいと評価されやすいだろう。実際、逸脱行為者が自身の行動を間違えたものだと認識していないことで、その逸脱者には人物の温かさの重要な要素である道徳性が欠けていると評価されることが示されている（Schwartz & Inbar, 2023）。したがって無神経な人物は、無神経であること自体によって冷たいと評価されると考えられる。

以上をまとめると、まず迷惑行為をした人物の方が、しなかった人物よりも冷たいと評価されると予想する。しかし迷惑行為の有無の効果は、迷惑の影響への理解の有無と交互作用すると予想する。すなわち、判断対象人物が無神経であることそのものが、その人物への冷たい

という評価を強く促すため、迷惑行為の有無による温かさの評価の差は、迷惑行為の悪影響を理解していない場合の方が、理解している場合よりも小さくなるだろう（仮説1a）。これと同時に、迷惑行為をしなかったとしても、迷惑を理解していない人物はその無神経さゆえに、理解している人物よりも冷たいと評価されると予想する（仮説1b）。

「有能さ」の次元では、無神経な人物は、迷惑行為の影響を理解している人物よりもネガティブに評価されると考えられる。人は自身の意見が客観的であり、理性のある他者ならば自身と同じ意見を共有していると考えやすい（ナイーブ・リアリズム, Ross & Ward, 1995）。そのため、自身のものと一致しない考えを持つ他者に対して、理解して当然のことを理解せずに、知的能力に劣ると評価する傾向がある（Hartman, Hester, & Gray, 2023; Sammut, Bezzina, & Sartawi, 2015）。これに基づくと、無神経であることは、何が迷惑であるのかという、理解して当然のことを理解していないことの表れといえるだろう。そのため、無神経な人物は知的能力に劣ると評価されると予想される。以上の議論から、迷惑行為の有無にかかわらず、迷惑を理解していない人物の方が、理解している人物よりも能力が低いと評価されると予想する（仮説2）。

第二に、迷惑行為が社会的に問題視されるほどの否定的反応を生じさせることの反映として、無神経な人物への単なる印象を越えた、より侮蔑的な評価を明らかにするため、人間性の評価として非人間化を検討する。Haslam (2006) は、動物と比較した時に人間にのみ当てはまる「理性的である」といった特性（Uniquely Human: UH）と、機械と比較した時に人間にのみ当てはまる「感情的である」といった特性（Human Nature: HN）の2次元による人間性の評価を提唱している。このうち、UHを否定することは動物的非人間化であり、HNを否定することは機械的非人間化である。特に、自身の行動によって生じる結果を認識し、物事の善悪を判断する能力である行為主体性（agency）の欠如は、動物的な性質と関連付けられやすい（Gray, Gray, & Wegner, 2007）。迷惑行為によってどのような結果が生じるのかを理解せず、その悪質性を認識していない無神経な人物は、この行為主体性が欠如していると評価されると考えられる。また、知的能力が欠如しているとみなされた人物は動物のようなものとして非人間化される（Loughnan & Haslam, 2007）。「有能さ」に関する仮説で述べたように、無神経な人物が知的能力に劣ると評価されるならば、同時に動物的に非人間化されると考えられる。これらの理由から、無神経な人物は理性の欠けた動物として非人間化されると予測される。以上のことから、迷惑行為の有無にかかわらず、迷惑を理解していない人物の方が、理解している人物よりも動物的に非人間化されると予想する（仮説3）。

第三に態度について、本研究では、相手の将来の行動に関する予測を介した社会的距離の確保と非難を検討する。人は単に他者への印象を形成するだけでなく、その他者の行動を予測し対処することの一環として、その人

物についての態度を形成すると考えられている (Fiske, 1992)。特に、ある人物が冷たいかどうかによって、その人物が有害な行動をするかどうかの予測がなされやすい (Fiske, Cuddy, & Glick, 2007)。そのため、人は判断対象人物を冷たいと評価することで、有害な行動の一種である迷惑行為を将来的により高い確率でその人物がすると予測するだろう。そして、それに対処するための態度を形成するだろう。この態度の表れとして、その判断対象人物と社会的距離を置き、その人物を非難することが考えられる。実際、有害な行動をとると予測される人物から、人は社会的距離を置こうとする (Corrigan, Markowitz, Watson, Rowan, & Kubiak, 2003; Martin, Pescosolido, & Tuch, 2000)。また、反社会的な考えや心的状態を持つ人物は非難されやすい (Cushman, 2008; Patil, Calò, Fornasier, Cushman, & Silani, 2017)。このような人物が非難されやすい理由は、非難には今後予測される他者の有害な行動を予防する機能があると考えられているためである (Martin & Cushman, 2016)。したがって、将来迷惑行為を実行しやすいと予測される人物ほど、より強い非難を受けると考えられる。ただし、前述のように他者の行動の予測は、その人物の温かさの評価に基づくと考えられる。仮説 1a にあるように、温かさの評価は迷惑行為の有無と迷惑の影響への理解の有無の交互作用を受けると考えられるため、温かさの評価を媒介変数とする社会的距離と非難も、これら 2 要因間の交互作用を受けると予想する。

以上のことから、次の 2 つの仮説を設定する。迷惑行為をした判断対象人物は、それをしなかった人物よりも社会的距離を置かれる。この効果は判断対象人物の冷たさの評価の増大と、将来の迷惑行為予測の 2 変数によって連続的に媒介される。しかし判断対象人物が迷惑を理解している場合と比較して、理解していない場合では、迷惑行為の有無による冷たさの評価の差が小さくなるため、この間接効果は小さくなる (仮説 4)。また、迷惑行為をした判断対象人物は、それをしなかった人物よりも非難される。この効果は判断対象人物の冷たさの評価の増大と、将来の迷惑行為予測の 2 変数によって連続的に媒介される。しかし判断対象人物が迷惑を理解している場合と比較して、理解していない場合では、迷惑行為の有無による冷たさの評価の差が小さくなるため、この間接効果は小さくなる (仮説 5)。

## 1.2 本研究の概要

本研究の目的は、無神経な人物は、その無神経さゆえに否定的に評価されることを示すことである。そのために、たとえ誰にも悪影響を及ぼさなかったとしても、無神経な人物は否定的に評価されることを、印象・人間性評価・態度の観点から多角的に検証する。2 つの研究と 1 つの予備的研究を通してシナリオ実験を行い、判断対象人物は、迷惑行為が周囲への迷惑になると理解しているかどうか、および実際に迷惑行為を実行したかどうかを操作し、判断対象人物への評価を測定する。本研究では特に、迷惑を理解していない人物と理解している人物

の間で、迷惑行為をしたかどうかによる否定的評価の差を比較する。この比較により、無神経な人物への評価の多くは、迷惑を理解していないこと自体に基づいているため、このような人物への評価は迷惑行為の有無の影響を受けにくいこと、また迷惑行為の有無にかかわらず否定的に評価されることを検証する。研究 1 では仮説 1a および 1b と仮説 2 を検証する。実験デザインを変更した研究 2 と、その予備的研究では、仮説 1a、1b、2 に加え、仮説 3 から仮説 5 を検証する。

## 2. 研究 1

### 2.1 方法

#### 2.1.1 参加者

クラウドソーシングサービスの Lancers 上で募集した、18 歳以上の日本国籍保有者 250 名が同意の上で実験に参加した。このうち、212 名を分析に用いた (男性 141 名、女性 71 名)。平均年齢 (標準偏差) は 41.49 歳 (9.12) であった。全参加者データのうち、同一 IP アドレスからの 3 回目以降のデータは分析から除外した。また、質問の呈示方法の設定に誤りがあった 7 名を除外した。さらに、回答に欠損のあった 1 名を除外した。最後に、シナリオ内で判断対象人物が実際に迷惑行為を実行したかどうかの操作確認の質問に対して、一度でも不正確な回答をした参加者は分析から除外した。この操作確認の完全正答率は、迷惑行為実行条件で 90.18 % (101/112 名)、非実行条件で 93.28 % (111/119 名) であった。

#### 2.1.2 手続き

実験デザインは参加者間要因 2 水準×参加者内要因 3 水準であった。参加者間要因は、判断対象人物の迷惑行為の有無に関する操作であった。実行条件では、判断対象人物が迷惑行為を行い、迷惑を被った人が発生したというシナリオが 3 種類呈示された。非実行条件では、判断対象人物が迷惑行為に該当するような行動を中止し、その結果として誰も迷惑を被らなかつたというシナリオが 3 種類呈示された。参加者内要因は、迷惑行為の影響に関する判断対象人物の理解についての 3 条件の操作であった。これらはそれぞれ、判断対象人物が自身の行動の結果を理解している条件 (理解あり条件)、理解していない条件 (理解なし条件)、統制条件として判断対象人物の心的状態に何も言及しない条件 (情報なし条件) であった。このうち、理解なし条件が本研究の焦点である無神経である状態に対応する。また、情報なし条件を設定した目的は、迷惑行為者の方が、非行為者より否定的に評価されるという前提を確認するためである。

各参加者は参加者内要因の操作によって 3 つの条件に割り当てられたが、これら 3 条件は 3 種の異なるシナリオ場面と組み合わせられ、この組み合わせはラテン方格に従って行われた。参加者は 1 つのシナリオを読むごとに操作確認の項目に回答し、続いてそのシナリオの内容に関する質問項目群に回答した。これを 1 セットとし、シナリオ 3 つ分の合計 3 セットを繰り返した。なお、操作

確認の次に内容に関する質問群が呈示されるという順序は保ったまま、各項目の呈示順序はランダム化され、カウンターバランスがとられた。

### 2.1.3 質問項目

迷惑に関する理解の有無の操作確認として、参加者はシナリオ内の判断対象人物が、自身の行動がどのような結果につながるのかを正確に予想していたと思う程度を7件法で回答した（1 = 予想していなかった、4 = どちらともいえない、7 = 予想していた）。また、迷惑行為の実行の操作確認として、参加者はシナリオ内で迷惑行為として描写されている行動を判断対象人物が実際に実行したか否かを、「実行しなかった」「実行した」の2件法で回答した。

また、判断対象人物への印象を測定するため、林（1978）を援用し、判断対象人物の冷たさの指標として6項目（「良い-悪い」「つめたい-あたたかい」など）、および能力の低さの指標として7項目の特性語の組み合わせを使用した（「たよりない-しっかりした」「知的でない-知的な」など）。これら13項目に関して確証的因子分析を行った結果、「能力の低さ」因子に対する「意思が弱い-意思が強い」の因子負荷量が.34と低かったため、この項目を除外した能力の低さ6項目（クロンバックの $\alpha = .93$ ）と人物の冷たさ6項目（ $\alpha = .98$ ）を尺度として用いた。参加者はそれぞれの対になった特性語のどちらが判断対象人物により当てはまるかを1から7で回答した。これら以外に、探索的な質問項目を設けた。探索的な質問項目の内容と、その分析結果については、電子付録に記載した。

### 2.1.4 倫理的配慮

本研究は、著者らの所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号：NUPSY-201109-F-01）。

## 2.2 結果

条件ごとの各従属変数の平均と標準偏差を表1に示す。

### 2.2.1 操作確認

判断対象人物の迷惑に関する理解の有無の操作確認を行った。そのために、判断対象人物が自身の行動の結果を予想していたと思う程度に関して、2要因混合分散分析を行った。分散分析にはanovakun関数version4.8.6（井関, 2021）を使用した。以降も同様である。分析の結果、要因間の有意な交互作用が検出された（ $F(1.95, 409.05) =$

$91.72, p < .001, \eta_g^2 = .22, 95\% \text{ CI} [.16, .28]$ ）。しかし、実行条件・非実行条件のいずれでも、理解なし条件の人物の方が、理解あり条件よりも有意に行動の結果を予想していなかったと評価されたことが確認された（実行： $F(1, 100) = 415.36, p < .001, \eta_g^2 = .68, 95\% \text{ CI} [.57, .76]$ ；非実行： $F(1, 110) = 1193.18, p < .001, \eta_g^2 = .87, 95\% \text{ CI} [.81, .91]$ ）。このことから、判断対象人物の迷惑の理解に関する操作が意図した通りに機能したと判断した。

### 2.2.2 印象評定

始めに仮説1aと1bを検証した。判断対象人物を冷たいと評価する程度に関して、2要因混合分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった（ $F(1.84, 387.06) = 189.64, p < .001, \eta_g^2 = .33, 95\% \text{ CI} [.27, .38]$ ）。単純主効果検定の結果、情報なし条件において、迷惑行為者（ $M = 5.27$ ）の方が非実行者（ $M = 2.57$ ）よりも冷たいと評価されていた（ $F(1, 210) = 335.78, p < .001, \eta_g^2 = .62, 95\% \text{ CI} [.53, .68]$ ）。このことから、迷惑行為をした方が冷たいと評価されるという前提が満たされていることが確認された。さらに迷惑行為をすることによるこの効果は、判断対象人物の迷惑の理解の有無によって調整された。理解あり条件でも理解なし条件でも、迷惑行為をした場合の方が冷たいと評価されていたが、迷惑行為の有無の効果量は理解なし条件の方が小さかった（理解あり： $M = 5.88$  vs.  $M = 2.44, F(1, 210) = 763.33, p < .001, \eta_g^2 = .78, 95\% \text{ CI} [.73, .82]$ ；理解なし： $M = 5.18$  vs.  $M = 4.90, F(1, 210) = 5.42, p = .02, \eta_g^2 = .03, 95\% \text{ CI} [.001, .08]$ ）。したがって、仮説1aは支持された。さらに、非実行条件における迷惑の理解の単純主効果も有意であった（ $F(1.60, 176.53) = 204.84, p < .001, \eta_g^2 = .56, 95\% \text{ CI} [.48, .63]$ ）。迷惑行為をしなくても、迷惑を理解していない人物（ $M = 4.90$ ）は理解している人物（ $M = 2.44$ ）よりも有意に冷たいと評価されていた（ $F(1, 110) = 332.45, p < .001, \eta_g^2 = 0.67, 95\% \text{ CI} [.58, .72]$ ）。したがって、仮説1bも支持された。これらの結果は、迷惑行為の有無によらず、無神経であることによって、その人物は冷たいと評価されることを意味している。

続いて仮説2を検証するため、判断対象人物に対する能力評価について、2要因混合分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった（ $F(1.90, 399.34) = 132.66, p < .001, \eta_g^2 = .26, 95\% \text{ CI} [.20, .31]$ ）。さらに、実行条件でも非実行条件でも、迷惑への理解の有無の単純主効果が有意であった（実行： $F(2.00, 200.00) = 3.99, p = .02, \eta_g^2 = .01, 95\% \text{ CI} [.001, .03]$ ；非実行： $F(1.82, 200.24) = 213.30,$

表1：研究1の判断対象人物に対する条件ごとの判断結果

	実行			非実行		
	理解あり	理解なし	情報なし	理解あり	理解なし	情報なし
理解の程度	6.16 (1.38)	2.11 (1.43)	3.41 (1.64)	6.42 (0.83)	1.58 (1.04)	6.02 (1.25)
冷たさ	5.88 (0.93)	5.18 (0.92)	5.27 (0.89)	2.44 (0.88)	4.90 (0.87)	2.57 (1.21)
能力の低さ	5.03 (0.85)	5.24 (0.85)	5.19 (0.68)	2.75 (0.93)	5.16 (0.78)	2.92 (1.10)

注：数値は平均値（標準偏差）を表す。

$p < .001$ ,  $\eta_g^2 = .57$ , 95 % CI [.51, .63]). これに基づき、迷惑行為実行の有無ごとに理解あり条件と理解なし条件の比較を行った。その結果、実行条件でも非実行条件でも、理解なし条件の人物は理解あり条件よりも能力を有意に低く評価されていた (実行:  $M = 5.03$  vs.  $M = 5.24$ ,  $F(1, 100) = 6.23$ ,  $p = .014$ ,  $\eta_g^2 = .02$ , 95 % CI [.001, .05]; 非実行:  $M = 2.75$  vs.  $M = 5.16$ ,  $F(1, 110) = 371.06$ ,  $p < .001$ ,  $\eta_g^2 = .66$ , 95 % CI [.59, .72])。これらの結果から、迷惑行為の有無にかかわらず、迷惑を理解していない人物は理解している場合よりも能力が低いと評価されることが明らかとなり、仮説 2 は支持された。

### 2.3 考察

研究 1 の目的は、無神経であること自体が、その人物への印象に与える影響を検討することであった。実験の結果、仮説 1a、1b、2 はいずれも支持された。つまり、迷惑行為者への否定的評価は、迷惑行為によって周囲に悪影響を与えたことよりも、その人物が無神経であることそのものに重きを置いて形成されることが示された。ただし研究 1 の問題として、判断対象人物の全体的な望ましさが、使用した評価項目への回答に影響した可能性を挙げられる。また、研究 1 で用いた能力に関する評価項目が、能力一般に関する広範なものであったという問題も挙げられる。無神経さが示唆するものが特に知的能力の低さである場合、研究 1 で用いた能力全般に関する評価項目は適当なものではない。他にも、同一の参加者が迷惑への理解の有無の各条件で回答を行っているため、理解に関する条件間の差異が強調され、この要因の効果が実際以上に大きくなった可能性がある。

研究 2 では、これらの問題に対処するため、迷惑の理解の有無の操作を参加者間で行い、各参加者は判断対象人物の迷惑の理解について 1 つの条件のみを呈示されるように変更する。そして、知的能力に絞った測定項目を用いることを中心に、人物評価に関する項目を修正し、仮説 1a、1b、2 を改めて検証する。また、判断対象人物を冷たいと評価することを通して、将来的に迷惑行為を実行しやすいと考えることが、その人物に対する社会的距離と非難の増大を予測することを検証する。なお、電子付録に記載した研究 2 の予備的研究では、この仮説を概ね支持する結果が得られている。さらに、動物的非人間化を検討対象に加えることで、無神経な人物の知的能力を低く見積もることによる侮蔑的な評価をより直接的に検討する。これらにより、無神経な人物への認知に関して、印象形成に加え、人間性の評価と態度形成の観点からも検討する。

## 3. 研究 2

研究 2 では、対人認知の基本次元による対人評価に加え、動物的非人間化、および判断対象人物についての予測と対処に関する検討も行う。検証する仮説は仮説 1a、1b、2 に加えて仮説 3 から 5 である。これにより、無神経であること自体に基づく否定的な人物評価を明らかにするに

とどまらず、実際に人々が無神経な他者に対してどのように対応するのかを明らかにすることを試みる。

### 3.1 方法

#### 3.1.1 参加者

クラウドソーシングサービスの Lancers 上で募集した、18 歳以上の日本国籍保有者 400 名が同意の上で実験に参加した。このうち、分析に使用した有効回答者数は 372 名 (男性 196 名、女性 175 名、その他 1 名) だった。平均年齢 (標準偏差) は 40.22 歳 (10.42) だった。これまでの研究と同様に、同一 IP アドレスからの 3 回目以降の回答は除外対象としたが、これに該当する回答は存在しなかった。また、シナリオ内で判断対象人物が実際に迷惑行為を実行したかどうかの操作確認の質問に対して、一度でも不正確な回答をした参加者は分析から除外した。この操作確認の正答率は、迷惑行為実行条件で 95.83 % (184/192 名)、非実行条件で 90.38 % (188/208 名) だった。

#### 3.1.2 質問項目

人物への印象の測定項目を研究 1 のものから修正し、冷たさの次元 ( $\alpha = .95$ ) では林 (1978) の「いじわるな - 親切な」「人の悪い - 人の良い」に「乱暴な - 優しい」「攻撃的な - おとなしい」を加えた。能力の低さの次元 ( $\alpha = .96$ ) では、林 (1978) の「知的でない - 知的な」に、「無能な - 有能な」「不注意な - 注意深い」「いい加減な - 丁寧な」を加えた。参加者は研究 1 と同様に、それぞれ対になった特性語のどちらが判断対象人物により当てはまるかを 1 から 7 で回答した。

非人間化の指標には、Sharma (2021) より 4 個の特性語を使用した。Sharma (2021) は、多数の特性語について「動物と比較した際に人間にのみ当てはまる程度 (UH)」、「機械と比較した際に人間にのみ当てはまる程度 (HN)」、「望ましさ」の 3 つの側面について評定を得たものである。UH については、「1 = 動物にも人間にも当てはまる」、「7 = 人間にのみ当てはまる」によって評定を求めている。HN については、「1 = 機械にも人間にも当てはまる」、「7 = 人間にのみ当てはまる」によって評定を求めている。「望ましさ」については、「1 = 全く望ましくない」、「7 = 非常に望ましい」で評定を求めている。本研究で使用された 4 項目は「従順な (UH-低・HN-低)」「のんきな (UH-低・HN-高)」「几帳面な (UH-高・HN-低)」「よくしゃべる (UH-高・HN-高)」であった。ここでの「高」とは、先述の先行研究において UH、HN それぞれの平均評定値が 4.50 以上であったものを、「低」とは平均値 3.00 以下であったものを指す。他方「望ましさ」においては、どの特性語も中程度 (3.00 ~ 5.00 点) で偏りが無いことを選定の条件とした。参加者は各特性語が判断対象人物に当てはまる程度を 7 件法で回答した (1 = 全く当てはまらない、7 = 非常によく当てはまる、 $\alpha = .86$ )。これら 4 個の特性語を用いて、判断対象人物に対する動物的非人間化の尺度得点を求めるためには、動物的であることを表す UH の低い「従順な (UH-低・HN-低)」「のんきな (UH-低・HN-高)」

が当てはまる程度の平均値から、動物との対比において人間的であることを表すUHの高い「几帳面な(UH-高・HN-低)」「よくしゃべる(UH-高・HN-高)」が当てはまる程度の平均値を引いた値を用いる。この差得点が正の方向に大きな値をとるほど、判断対象人物をより動物的に非人間化していることを意味する。この方法でUHの尺度得点を算出することで、判断対象人物のHNに基づく評価が評定値に与える影響を打ち消すことを意図した。

また、判断対象人物の将来の行動に関する予測を検討するため、シナリオで題材にした迷惑行為とは別の4つの迷惑行為について、判断対象人物が今後実行する可能性を評価するように求めた。ここで予測することを求めた別の迷惑行為として、吉田他(1999)によって挙げられた迷惑行為群のうちから、「ガムを路上に吐き捨てる」、「指定場所以外での自転車の駐輪」、「狭い通路ですれ違う際に道を譲らない」、「電車内で他人の足を踏んで気づかないふりをする」の4つを使用した。参加者は、シナリオ中の場面の次の日に判断対象人物がこれら4つの行為を行う可能性をそれぞれ7件法で回答した(1=絶対に行わない、7=必ず行う、 $\alpha = .94$ )。

さらに、判断対象人物への態度として、その人物に対する社会的距離と非難の程度を回答するように求めた。社会的距離の測定項目はそれぞれ、「電車内でその人が隣に座ってきても嫌ではない」、「知り合いだった場合、自分からこの人に挨拶する」、「この人と目を合わせても平気だ」であった( $\alpha = .89$ )。参加者はこれら3項目の内容を判断対象人物に対してどの程度思っているかを7件法で回答した(1=全くそう思わない、7=強くそう思う)。非難についても3項目に7件法で回答するように求めた。各項目はそれぞれ、「判断対象人物が行ったことに関して、あなたは判断対象人物をどの程度非難しますか」(1=全く非難しない、7=非常に強く非難する)、「判断対象人物が行ったことに関して、判断対象人物は咎められるべきだとあなたは思いますか」(1=全くそうは思わない、7=強くそう思う)、「あなたは、判断対象人物が今後不幸に見舞われてしかるべきだと思いますか」(1=全くそうは思わない、7=強くそう思う)であった( $\alpha = .91$ )。

操作確認については、研究1と同一のものを使用した。

### 3.1.2 手続き

研究2では、判断対象人物の迷惑に関する理解の有無を参加者間要因として操作した。また、迷惑に関する理解の有無の操作を理解あり条件と理解なし条件の2水準に変更した。したがって、今回の実験では2(判断対象人物の迷惑行為実行の有無)×2(判断対象人物の迷惑に関する理解の有無)の参加者間要因計画の実験デザインとした。参加者は、判断対象人物の迷惑行為実行の有無と、迷惑に関する理解の有無の組み合わせからなる4つの実験条件のいずれか1つに、ランダムで割り当てられた。各実験条件において、参加者には3種類のシナリオ場面が呈示された。使用したシナリオ場面はこれまでの実験で使用したものと同一である。参加者は、シナリオを1つ読むごとに判断対象人物に関する行動予測、非難、非人間化の質問に回答した。続いて、残りの質問項目、最後に操作確認の質問項目に回答した。これを1セットとし、3シナリオ分の全3セットをランダムな順に繰り返した。

### 3.1.3 倫理的配慮

本研究は、著者らの所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施された(承認番号: NUPSY-210426-F-02)。

## 3.2 結果

条件ごとの各従属変数の平均と標準偏差を表2に示す。

### 3.2.1 操作確認

判断対象人物の迷惑に関する理解の有無の操作確認を行った。自身の行動の結果に関する判断対象人物の理解の程度に関して、2要因参加者間分散分析を実施した。その結果、迷惑に関する理解の有無の主効果が有意であり、理解あり条件( $M = 5.79$ )の方が理解なし条件( $M = 2.03$ )よりも、判断対象人物が自身の行動の影響を理解していたと評価された( $F(1, 368) = 855.11, p < .001, \eta_g^2 = .70, 95\% \text{ CI} [.65, .74]$ )。なお、2要因間の有意な交互作用は検出されなかった( $F(1, 368) = 1.31, p = .25, \eta_g^2 < .01, 95\% \text{ CI} [.001, .03]$ )。このことから、判断人物の理解に関する操作が意図した通りに機能したと判断した。

表2: 研究2の判断対象人物に対する条件ごとの判断結果

	実行		非実行	
	理解あり	理解なし	理解あり	理解なし
理解の程度	5.88 (1.26)	2.26 (1.55)	5.71 (1.04)	1.79 (1.05)
冷たさ	5.29 (0.97)	4.72 (0.79)	2.48 (0.69)	4.38 (0.70)
能力の低さ	5.17 (0.95)	5.67 (0.75)	2.97 (0.92)	5.48 (0.82)
動物的非人間化	0.40 (0.97)	1.15 (1.08)	0.14 (0.79)	1.08 (0.93)
迷惑行為予測	5.04 (0.95)	4.56 (0.89)	2.51 (0.70)	4.34 (0.88)
非難	4.50 (1.29)	4.41 (1.05)	1.39 (0.56)	3.56 (1.07)
社会的距離	4.75 (1.08)	4.46 (1.22)	2.40 (0.90)	4.26 (1.22)

注: 数値は平均値(標準偏差)を表す。

### 3.2.2 印象評定

仮説 1a および 1b を検証するため、判断対象人物を冷たいと評価する程度に関して、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった ( $F(1, 368) = 224.62, p < .001, \eta_g^2 = .38, 95\% \text{ CI} [.30, .44]$ )。そのため、迷惑の理解の有無別に、行為実行の有無の単純主効果を検討した。その結果、迷惑行為をしたことでより冷たいと評価される効果の大きさは、判断対象人物が迷惑を理解していた場合と比較して、理解していなかった場合で小さくなっていった (理解あり:  $M = 5.29$  vs.  $M = 2.48, F(1, 368) = 605.88, p < .001, \eta_g^2 = .62, 95\% \text{ CI} [.57, .67]$ ; 理解なし:  $M = 4.72$  vs.  $M = 4.38, F(1, 368) = 8.03, p < .01, \eta_g^2 = .02, 95\% \text{ CI} [.01, .06]$ )。また、非実行条件における迷惑への理解の有無の単純主効果も有意であり、迷惑行為を実行せずとも、迷惑を理解していない人物は有意により冷たいと評価されていた ( $M = 4.38$  vs.  $M = 2.48, F(1, 368) = 267.60, p < .001, \eta_g^2 = .42, 95\% \text{ CI} [.35, .48]$ )。つまり、迷惑行為を実行せずとも、無神経であること自体によって、その人物はより冷たいと評価された。これらの結果は、研究 1 と同様に仮説 1a と 1b をともに支持するものである。

続いて仮説 2 を検証するため、判断対象人物の能力評価に関して、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった ( $F(1, 368) = 123.31, p < .001, \eta_g^2 = .25, 95\% \text{ CI} [.18, .32]$ )。単純主効果検定の結果、迷惑行為の有無のいずれでも、無神経な人物の方が、迷惑を理解している人物より有意に能力を低く評価された (非実行:  $M = 5.48$  vs.  $M = 2.97, F(1, 368) = 389.61, p < .001, \eta_g^2 = .51, 95\% \text{ CI} [.45, .57]$ ; 実行:  $M = 5.67$  vs.  $M = 5.17, F(1, 368) = 15.60, p < .001, \eta_g^2 = .04, 95\% \text{ CI} [.01, .09]$ )。このことから、迷惑行為の有無にかかわらず、自身の行動の影響を理解していない人物は能力に劣ると評価されるという仮説 2 は支持された。

### 3.2.3 非人間化

自身の行動の影響を理解していない人物は、知的能力に劣る動物のように非人間化されること (仮説 3) を検証するため、判断対象人物に動物的性質が当てはまる程度に関して、2 要因参加者間分散分析を行った。その結果、迷惑の理解の有無の主効果のみが検出され、理解なし条件 ( $M = 1.12$ ) の方があり条件 ( $M = 0.26$ ) よりも有意に動物的性質が当てはまると判断されていた ( $F(1, 368) = 74.65, p < .001, \eta_g^2 = .17, 95\% \text{ CI} [.10, .24]$ )。すなわち、迷惑行為の有無にかかわらず、迷惑を理解していない人物は、知的能力に劣るものとして表象されやすい動物により近い性質を備えるとして、非人間化されやすいことが示された。したがって、仮説 3 は支持された。

重要な点として、無神経な人物への非人間化は動物的非人間化の形でのみ表れ、機械的非人間化は認められなかった。本研究で使用した尺度項目は、動物的非人間化と同時に機械的非人間化の程度も測定可能である。この場合、機械的であることを表す、HN の低い特性語が当てはまる程度の平均値から、機械との対比において人間

的であることを表す、HN の高い特性語が当てはまる程度の平均値を引いた値を用いる。本研究では、HN の低い特性語は「従順な (UH-低・HN-低)」「几帳面な (UH-高・HN-低)」であった。また、HN の高い特性語は「のんきな (UH-低・HN-高)」「よくしゃべる (UH-高・HN-高)」であった。これによって求めた機械的非人間化得点について 2 要因参加者間分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ( $F(1, 368) = 77.81, p < .001, \eta_g^2 = .17, 95\% \text{ CI} [.11, .24]$ )。単純主効果検定の結果、非実行条件では迷惑を理解している人 ( $M = 1.38$ ) の方が理解していない人 ( $M = -1.45$ ) よりも機械的に非人間化されていた ( $F(1, 368) = 256.39, p < .001, \eta_g^2 = .41, 95\% \text{ CI} [.34, .47]$ )。実行条件でも同様に、迷惑を理解している人の方が理解していない人よりも機械的に非人間化されていた ( $F(1, 368) = 12.02, p < .001, \eta_g^2 = .03, 95\% \text{ CI} [.01, .07]$ )。しかし、両条件とも平均得点は負の値であった (理解あり:  $-0.91, 95\% \text{ CI} [-1.18, -0.63]$ 、理解なし:  $-1.52, 95\% \text{ CI} [-1.73, -1.31]$ )。すなわち、迷惑を理解してそれをしなかった、最も望ましい人物こそが機械のように非人間化された一方で、他の条件ではむしろ機械よりも人間的だと判断されており、無神経な人物に対する機械的な非人間化は見られなかった。

まとめると、無神経な人物に対する非人間化は特に動物的非人間化として表れることが示された。しかも迷惑の理解の有無による効果のみが生じ、迷惑を理解しながらもその行為をあえてするような人物に対する動物的非人間化の評価が他の条件よりも突出しなかった。これは、動物的非人間化の評価が単なる全体的な否定的印象の反映ではないことを示唆する。

### 3.2.4 印象形成と行動予測、社会的距離、非難の関係

仮説 4 を検証するため、迷惑行為を実行した人物をより冷たいと評価し、それによって迷惑行為を今後実行しやすくと考え、社会的距離を増大させることを予測する媒介モデルを検討した。このモデルの推定には、R の lavaan パッケージ (Rosseel, 2012) を使用し、間接効果の信頼区間の推定には、リサンプリング数 5000 回のブートストラップ法を用いた。その結果を図 1 (a) に示す。迷惑行為者に対して社会的距離を増大させる過程で、判断対象人物をより冷たいと評価することに依りて、将来の迷惑行為の確率をより高く見積もることの間接効果が認められた。しかし、その効果は判断対象人物が迷惑を理解しているかどうかによって調整されていた ( $\beta = 1.40, 95\% \text{ CI} [1.13, 1.68]$ )。具体的には、迷惑を理解している人物と比較して、理解していない人物では迷惑行為をすることの間接効果が小さくなっていった (理解あり:  $\beta = 1.57, 95\% \text{ CI} [1.30, 1.85]$ ; 理解なし:  $\beta = 0.16, 95\% \text{ CI} [0.04, 0.29]$ )。間接効果の減少は主に、迷惑行為者をより冷たく評価する効果が、理解なし条件で小さくなることに由来していたといえる。実際、媒介モデルの一部である、人物を冷たいと評価することが将来の迷惑行為の予測を媒介して社会的距離を増大させるという間接効果に対しては、人

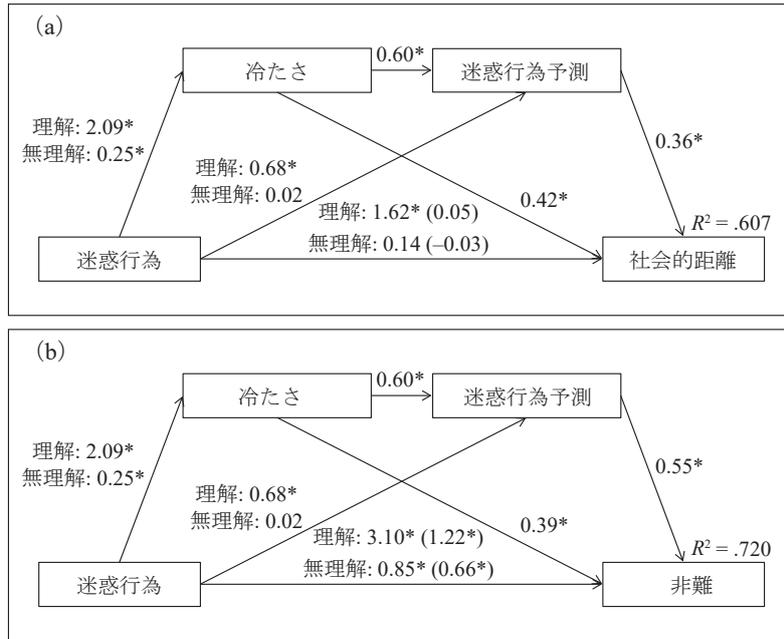


図 1：迷惑行為者への態度形成に至る調整媒介過程

注：(a) は、判断対象人物が迷惑行為を実行することで社会的距離を増大させる過程で、人物の冷たさと将来の迷惑行為の予測を媒介する媒介モデルの推定結果を表す。(b) は、非難に対する同様の媒介過程の推定結果を表す。各パス係数は標準化偏回帰係数を表す。また、迷惑行為実行から社会的距離および非難に直接伸びるパスに付与された数値のうち、括弧で囲われた数値は迷惑行為実行の直接効果の大きさを表し、括弧で囲われていないものは総合効果の大きさを表す。いずれのモデルでも迷惑行為を実行したことの直接効果および従属変数への総合効果は、その人物の迷惑への理解の有無によって調整されていた。 $*p < .05$ 。

物の無神経さの調整効果は検出されなかった ( $\beta = -0.13$ , 95% CI [-0.32, 0.04])。したがって、無神経な人物が迷惑行為をしたとしても、社会的距離を置かれないというわけではなく、迷惑行為の有無にかかわらず無神経であること自体によって冷たいと評価され、否定的態度を向けられたのだと考えられる。このことは、表 2 にあるように、理解なし条件では迷惑行為実行の有無にかかわらず、冷たさ・迷惑行為予測・社会的距離の評定値が高いことから確認できる。これらの結果から、判断対象人物の行動と迷惑への理解に応じた冷たさ—温かさの評価を行い、それに応じて将来の迷惑行為の予測と社会的距離の確保を行っていることが確認され、仮説 4 は支持された。

続いて、図 1 (b) に示したように、従属変数を社会的距離から非難に変更した媒介モデルによって、仮説 5 を検証した。社会的距離の場合と同様に、迷惑行為の実行が非難を増大させる間接効果に対して迷惑の理解の調整効果が検出された ( $\beta = 1.70$ , 95% CI [1.33, 2.08])。実際、迷惑を理解している人物と比較して、無神経な人物では迷惑行為をすることの間接効果が小さくなっていた (理解あり： $\beta = 1.89$ , 95% CI [1.51, 2.29]; 理解なし： $\beta = 0.19$ , 95% CI [0.04, 0.36])。また、人物を冷たいと評価するほど、将来の迷惑行為の確率を高く見積もり、それによって非難の増大を予測する間接効果の部分では、人物の無神経さの調整効果が検出されなかった ( $\beta = 0.05$ , 95% CI [-0.24, 0.32])。これらの結果から、たとえ迷惑行為しなかったとしても、無神経であること自体がその人物の温かさの欠如を示唆し、それに応じて将来迷惑行為を実行する確率

が高いと予測され、将来の迷惑行為の発生を抑止するために非難が行われるという認知過程が示唆される。したがって、仮説 5 は支持された。

#### 4. 総合考察

本研究の目的は、何が迷惑行為に当たるのかを理解していない無神経な人物は、無神経であること自体を以て否定的に評価されるのかを検討することであった。研究 1 と研究 2、および予備的研究を通して、たとえ迷惑行為をしなかったとしても、無神経であること自体に否定的な評価が向けられることを示した。研究 1 では、無神経な人物に対する温かさや能力についての印象を検討した。その結果、無神経な人物の実際の行動は参照されにくく、むしろ無神経であること自体によって否定的な印象を向けられることが明らかになった。研究 2 とその予備的研究では、検討対象に人物への態度と人間性の評価を加えた。ここでも、無神経な人物の実際の行動は、無神経であることと比較して考慮されにくく、むしろ無神経であること自体に否定的な対人評価や態度が向けられることが示された。

本研究の結果に基づくと、迷惑行為が深刻な害を発生させるわけではないにもかかわらず、社会問題かのように扱われる理由は、迷惑行為者の無神経さが不快感を生むためだといえる。これまでに迷惑行為が否定的に評価される原因を検討した研究は、迷惑行為自体の性質に着目してきた (例えば 吉田他, 1999)。しかし、本研究は迷惑行為に対する評価は、行動そのものよりもむしろ、行為

者の心的状態の評価に基づくことを示している。これは、他者に関する対人認知を行う過程の中で、その心的状態を推論することが大きな影響力を持つとする仮説 (Reeder, 2009) とも符合する。したがって本研究は、迷惑行為に対する属人的評価を検討することが有効であることを示す。

また、本研究は迷惑行為研究以外にも、心的状態の推論に基づく対人認知の研究にも寄与する。心的状態の推論が対人認知に及ぼす影響を検討したこれまでの研究の多くは、他者に対する積極的な危害意図を持つ人物の印象や道徳性が否定的に評価されることを示してきた (例えば Hirozawa et al., 2020; Inbar et al., 2012)。その一方で、Gromet, Goodwin, & Goodman (2016) や Krull, Seger, & Silvera (2008)、Schwartz & Inbar (2023) といった、他者への配慮や親切心などの望ましい心的状態が欠如した人物に対して、人々がどのような評価を下すのかを検討した研究は限られている。特に本研究のように、実際の逸脱行為を伴わなくとも、望ましい心的状態の欠如自体が否定的評価を生じさせることを示した研究は少ない。これらの類似研究と比較した時の本研究の特徴は、無神経であること自体によって冷たい人物だと評価され、否定的な態度を向けられることを示したことである。また、能力次元の評価は他者への積極的な危害意図を持つ人物以上に低くなり、その反映として知的能力に欠けた動物として非人間化されることを示した点も本研究の特徴である。これにより、積極的な悪意を抱かずとも、無神経であることだけでも否定的評価の対象となることが明らかとなった。

#### 4.1 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として三点を挙げる。第一に本研究では、迷惑行為の有無にかかわらず、無神経な人物が否定的に評価されることを示すことで、無神経であること自体が否定的評価を生むことを示した。しかし、迷惑行為者への評価を形成する過程で、この人物が迷惑の影響を理解していないことが、どのようにして否定的評価を生むのかについては明らかではない。そのため、迷惑行為者の評価にはその行為者の心的状態があまり反映されず、むしろその評価は主に迷惑行為を実行したという情報に基づいていたという結果の解釈も可能である。これは、判断対象人物が迷惑行為を実行した条件で、迷惑への理解の有無の条件間の差が有意ながらも小さかったことに基づく。一方、本研究では、無理解かつ実行条件における評価から、迷惑行為をしたことに基づく評価を差し引いて残ったのが、無理解かつ非実行条件における評価であると考えた。そして、これらの評価の差異が小さいことから、行為の有無による効果は小さく、むしろ無神経な行為者への評価の実体の大半は、無神経であること自体に基づいていると解釈した。現状、無神経な迷惑行為者への対人認知のメカニズムは十分に明らかでないため、これらの解釈の妥当性について今後のさらなる検討が必要である。

第二に、本研究で用いた指標の評価結果全般に概ね同様の傾向がみられたのは、いわゆる「ハロー効果」やキャリアオーバー効果に過ぎないかもしれないという点を考

慮すべきである。研究2の機械的非人間化の結果は、この評価が単なる人物の全体的な望ましきだけで説明できないことを示唆するが、証拠は十分でない。今後の研究では、例えば Bastian, Denson, & Haslam (2013) が行ったように人物の全体的な望ましさを測定し、これを統計的に統制したうえで、興味のある評価指標に対して無神経であることが及ぼす影響を検討することが有用だろう。

第三に、本研究の一般化可能性についても、さらなる検討が必要である。本研究で用いた迷惑行為は、駅・電車内での迷惑行為ランキングの上位に位置しており、広く認知されているものである。したがって、他の状況下での迷惑行為や、認知度があまり高くない迷惑行為に関しても、それを迷惑だと理解していない人物への評価を検討する必要がある。

本研究は幅広い評価指標を用いて、無神経であること自体が否定的に評価されることを、2つの研究と1つの予備的研究に渡って示した。このことは、迷惑行為者に対する否定的評価が、行動よりもむしろ望ましくない心的状態に基づいていることを示唆している。今後は、無神経さに向けられる否定的評価が生じる過程を明らかにするとともに、本研究の一般化可能性について検討を重ねる必要があるだろう。

#### 謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金 (18H01078、23K22344、23KJ1096) およびキャノン財団助成金による助成を受けた。本論文は第1著者が令和3年度に名古屋大学大学院情報学研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。本研究結果の一部は、The 23rd (2022)、24th (2023) Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology、日本社会心理学会第64回大会 (2023) で発表された。

本研究の分析結果の一部、データ、分析コード、実験に使用した各シナリオ、実験2の予備的研究の内容を電子付録に掲載する。電子付録はOSFで公開している (<https://osf.io/tg79r/files/osfstorage>)。

#### 引用文献

- Abele, A. E., Ellemers, N., Fiske, S. T., Koch, A., & Yzerbyt, V. (2021). Navigating the social world: Toward an integrated framework for evaluating self, individuals, and groups. *Psychological Review*, 128 (2), pp. 290-314.
- Bastian, B., Denson, T. F., & Haslam, N. (2013). The roles of dehumanization and moral outrage in retributive justice. *Plos One*, 8 (4), e61842.
- Corrigan, P., Markowitz, F. E., Watson, A., Rowan, D., & Kubiak, M. A. (2003). An attribution model of public discrimination towards persons with mental illness. *Journal of Health and Social Behavior*, 44 (2), pp. 162-179.
- Cushman, F. (2008). Crime and punishment: Distinguishing the roles of causal and intentional analyses in moral judgment. *Cognition*, 108 (2), pp. 353-380.

- Fiske, S. T. (1992). Thinking is for doing: Portraits of social cognition from Daguerreotype to laserphoto. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63 (6), pp. 877-889.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11 (2), pp. 77-83.
- Gray, H. M., Gray, K., & Wegner, D. M. (2007). Dimensions of mind perception. *Science*, 315 (5812), pp. 619-619.
- Gromet, D. M., Goodwin, G. P., & Goodman, R. A. (2016). Pleasure from another's pain: The influence of a target's hedonic states on attributions of immorality and evil. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 42 (8), pp. 1077-1091.
- Hartman, R., Hester, N., & Gray, K. (2022). People see political opponents as more stupid than evil. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 01461672221089451.
- Haslam, N. (2006). Dehumanization: An integrative review. *Personality and Social Psychology Review*, 10 (3), pp. 252-264.
- 林文俊(1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 25, pp. 233-247.
- Hirozawa, P. Y., Karasawa, M., & Matsuo, A. (2020). Intention matters to make you (im)moral: Positive-negative asymmetry in moral character evaluations. *The Journal of Social Psychology*, 160 (4), pp. 401-415.
- Inbar, Y., Pizarro, D. A., & Cushman, F. (2012). Benefiting from misfortune: When harmless actions are judged to be morally blameworthy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38 (1), pp. 52-62.
- 井関龍太(2021). ANOVA君 (Version 4.8.6) 井関龍太のページ. <http://riseki.php.xdomain.jp/index.php?ANOVA%E5%90%9B>. (閲覧日: 2022年1月25日)
- 石田晴彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 (2000). 社会的迷惑に関する研究 (2) —迷惑認知の根拠に関する分析—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, pp. 25-33.
- 北折充隆 (2008). 電車内の迷惑行為評価に関する検討 —悪質行為はKYか?—. 金城学院大学論集 人文科学編, 5, pp. 16-26.
- 北折充隆 (2017). ルールを守る心—逸脱と迷惑の社会心理学—. ナカニシヤ出版.
- Krull, D. S., Seger, C. R., & Silvera, D. H. (2008). Smile when you say that: Effects of willingness on dispositional inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44 (3), pp. 735-742.
- Laurent, S. M., Nuñez, N. L., & Schweitzer, K. A. (2015). The influence of desire and knowledge on perception of each other and related mental states, and different mechanisms for blame. *Journal of Experimental Social Psychology*, 60, pp. 27-38.
- Loughnan, S. & Haslam, N. (2007). Animals and androids: Implicit associations between social categories and nonhumans. *Psychological Science*, 18 (2), pp. 116-121.
- Martin, J. K., Pescosolido, B. A., & Tuch, S. A. (2000). Of fear and loathing: The role of 'disturbing behavior,' labels, and causal attributions in shaping public attitudes toward people with mental illness. *Journal of Health and Social Behavior*, 41 (2), pp. 208-223.
- Martin, J. W. & Cushman, F. (2016). The adaptive logic of moral luck. In J. Sytsma & W. Buckwalter (eds.), *A companion to experimental philosophy* (pp. 190-202). John Wiley & Sons.
- Patil, I., Calò, M., Fornasier, F., Cushman, F., & Silani, G. (2017). The behavioral and neural basis of empathic blame. *Scientific Reports*, 7 (1), 5200.
- Pizarro, D. A. & Tannenbaum, D. (2012). Bringing character back: How the motivation to evaluate character influences judgments of moral blame. In M. Mikulincer & P. R. Shaver (eds.), *The social psychology of morality: Exploring the causes of good and evil* (pp. 91-108). American Psychological Association.
- Reeder, G. D. (2009). Mindreading: Judgments about intentionality and motives in dispositional inference. *Psychological Inquiry*, 20 (1), pp. 1-18.
- Reeder, G. D., Kumar, S., Hesson-McInnis, M. S., & Trafimow, D. (2002). Inferences about the morality of an aggressor: The role of perceived motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83 (4), pp. 789-803.
- Ross, L. & Ward, A. (1995). Psychological barriers to dispute resolution. In M. P. Zanna (ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 27, pp. 255-304). Academic Press.
- Rosseel, Y. (2012). Lavaan: An R package for structural equation modeling. *Journal of Statistical Software*, 48 (2), pp. 1-36.
- Sammut, G., Bezzina, F., & Sartawi, M. (2015). The spiral of conflict: Naïve realism and the black sheep effect in attributions of knowledge and ignorance. *Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology*, 21 (2), pp. 289-294.
- Schwartz, S. A. & Inbar, Y. (2023). Is it good to feel bad about littering?: Conflict between moral beliefs and behaviors for everyday transgressions. *Cognition*, 236, 105437.
- Sharma, A. K. (2021). *An empirical study of dehumanization of social categories: Development of Japanese scale and investigation of reliability and validity* (Unpublished master's thesis). Nagoya University.
- Uhlmann, E. L., Pizarro, D. A., & Diermeier, D. (2015). A person-centered approach to moral judgment. *Perspectives on Psychological Science*, 10 (1), pp. 72-81.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田晴彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1). 名古屋大学教育学部紀要, 46, pp. 53-73.

受稿日: 2024年12月24日

受理日: 2025年5月2日

発行日: 2025年6月30日

Copyright © 2025 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International] license.



<https://doi.org/10.4189/shes.23.73>